

紙芝居を使って赤ちゃんのケアの仕方を説明する保健師のグロリアさん。「絵を使った説明は頭に入りやすいと患者さんたちからも好評です」



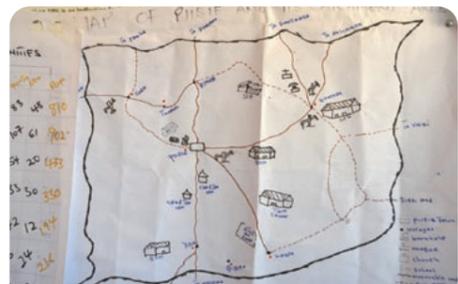
高層ビルが立ち並ぶアクラから車  
しかし、まだまだ課題はある。  
フリカの「優等生」とも呼ばれて  
きた。  
な紛争を経験することもなく、大  
はなし。約半世紀にわたり、大  
が飛んでいて、アクセスは不便で  
ヨーロッパ、北米などから直行便  
そう聞くと遠く感じるが、中東、  
り継ぎも含めて飛行機で丸1日。  
日本から首都アクラまでは、乗

終えた地でもある。  
熱病の研究をし、志半ばで生涯を  
指に入るほど。あの野口英世が黄  
るカカオ豆の生産は、世界で三本  
チョコレートだろうか。原料とな  
の人が思い浮かべるのは、やはり  
ツットや露店が密集して立ち並び、  
る小さな町はにぎやかだ。マーケ  
数十キロおきに、道路脇に見える  
アフリカの中でも、日本人にと  
ってなじみのある国ガーナ。多く  
の片道12時間  
辺境の地に生きる人々

どこまでも真つすぐに続く道、  
大きな楕円を描いて広がる地平  
線。視界を遮るものがほとんどな  
い中で、唯一の障害物としてヤギ  
の群れが現れた。大きなトラック  
にさえ目もくれず、堂々と前を横  
切っていく。西アフリカのガーナ  
の日常だ。  
を北に走らせると、明らかにその  
発展ぶりが違うのだ。そう、地方  
の人たちの生活は、決してまだ豊  
かとはいえない。その現実を確か  
めるべく目指したのは、車で北に  
12時間、隣国ブルキナファソと国  
境を接するアッパーウエスト州  
だ。「幹線道路はよく整備されて  
いるので、時間はかかりますが快  
適ですよ」。州都ワマで案内して  
くれたのは、池田高治JICA専  
門家（アイ・シー・ネット株式会  
社）。青年海外協力隊として、ホ  
ンジュラスでマリアリア対策に奔走  
したのは約30年前。以来、国際協  
力一筋の池田専門家はかれこれ  
う8年、この州に通い続けている。  
彼が力を入れてきたのが、地域の  
人々を巻き込んだ保健医療サービ  
スの向上だ。

**すぐに治療できない  
不安が脅かす健康**

「いらつしゃい。患者さんの診  
察が終わるまで少し待ってくださ  
いね」。朝9時、池田専門家と一  
緒に訪れたのは、州都ワマからさら  
に車で1時間ほど行ったところ  
にある長屋。入口で迎えてくれたの  
は、保健師のグロリア・ドマナン  
さんだ。妊娠2カ月目に入ったと  
ころのアサナ・イデウンスさんの  
定期健診をしていた。「妊娠中で  
不安も多いから、グロリアさんの  
アドバイスは心強いよ」。大き



【右】村に建設された長屋造りの医療施設。診察室の隣には、保健師の居住スペースがある  
【左】診察室の壁には、管轄地域の書きの地図が貼られている

アフリカの中でも比較的情勢が安定し、  
順調に経済成長を続けてきたガーナ。  
しかし、地方での生活は豊かとはいえない。  
全ての人が安心して暮らせる社会を目指し、  
地域が一丸となった取り組みの現場取材した。

写真：久野武志（フォトグラファー）

地域の命は  
私たちが守る



ガーナの地方部でせつせとまき  
や炭を運ぶ女性たち。決して豊  
かとはいえない生活だが、村は  
人々の活気であふれている

40度近い熱で来院した4歳のアブダル・ワリンくん。マラリアの疑いがあるため、体をふいて清潔にしていた



車ですらに1時間、次に向かった先はドリモン亜郡保健所。手術室や分娩台、ワクチン用の冷蔵庫、医薬品などがそろった施設だ。所長のドルタス・ヌオサさんは、3カ月に一度、グロリアさんのもとを訪れて設備や備品、カルテなどのチェックをしているという。訪問時に記入するチェックシートは、プロジェクトのアドバイスを受けて作成されたものだ。「何かあったらいつでも連携できるように、

**みんなの力で  
貧困から脱却**

識が広まってきているように感じている。

「住民自身でCHPSのシステムを動かす体制は整いつつあります。もともとたくさんの人材が育ち、建物もできれば、より多くの人が健康的な生活を送れるようになるはずです」と池田専門家。住民みんなのでつくり上げていく地域の仕組み。それを動かすために汗を流す人々。アッパーウエスト州では、自身が果たすべき役割を一人一人が考え、行動しようという動きが生まれつつある。



[右]日本の協力でアッパーウエスト州には約60のCHPSを建設中。株式会社毛利建築設計事務所が施工監理を担当し、機能的で長持ちする工夫が凝らされている  
[左]州内の医療保健の状況について、池田専門家に説明するサリア郡保健局長。「CHPSが持続的に機能するように、住民の関わりをもっと密にしていきたい」

**人々の健康の意識を  
高めるために**

村々の家を回って出張診療をする。これも、CHPSの保健師たちの重要な役割の一つだ。「健康に対する意識を一人一人に広めるためには、彼らの生活場所に足を運ぶことも大切です」とグロリアさん。移動時の相棒は、YAMAHAの真っ赤なバイクだ。

「CHPSの強みは、運営の主体がコミュニティであること。彼ら自身がつくる彼ら自身のための施設だからです」と池田専門家は力を込める。CHPSごとに運営委員会があり、住民と保健師が定期的に会合を開いている。

グロリアさんの診察室には、模造紙にびっしりと書かれた「TODORIST」が貼られていた。室内の切れた電線の修理、分娩用の離れの建設……。地域の誰が責任を持つて担当するか、予算をどう使うかも自分たちで決める。「本当にどうしたらいいかを真剣に考えているからこそ、いろいろなアイデアが生まれてくる。地域の私たちの命は地域で守るという意識が広まってきているように感じている。」

「運営委員会の発案により、CHPSに行く道路、水道施設の修復など、保健医療分野以外の取り組みも強化されるようになりました。全てのセクターが関わり合っている問題。最終的には、貧困削減につながるものです」と、ウエスト郡保健局長のバシリア・サリア局長は話す。

最近特に力を入れてるのが、母子保健分野の啓発活動。アッパーウエスト州で5歳になる前に命を落としてしまう子どもは1000人に128人、妊産婦の死亡率は10万人に66人と、依然として改善が必要だ。「これ以上死んでいく妊産婦を見たくない」と、自宅出産をやめるなど住民主導での取り組みが始まっている。



“地域の保健室”で診察を待つ住民たち。お互いに助け合って生きる精神が広がっている

くなつたおなかをさすりながら話すアサナさんの家は、ここから歩いて5分だという。

「この建物はいわゆる、地域の保健室。保健師が常駐して、コミュニティの人たちの健康を守っているんですよ」と池田専門家。ガーナで設備の整った医療施設と

いえば、たいてい1郡に一つ程度。距離的にも金銭的にも、一般の人たちの日常からは遠い存在だ。

保健医療サービスを受けることができず、病気が悪化したり、命を落としてしまう人もいる。救える命を見逃さしたくない。みんながそう思っていた。そこで政府

は2000年代に入ってから、コミュニティレベルにCHPS (Community based Health Planning and Services) と呼ばれる医療施設を設置することに。身近な場所で簡単な治療が受けられ、衛生や疾病予防の地域のリーダーとなる保健師を駐在させるような仕組みづくりに乗り出した。

「隣の部屋に寝泊まりしているの。24時間、いつでも対応できるようにね」とグロリアさん。診察室の机の上にはカルテが積み重ねられていて、大きな病院をたたくように、すぐに診てくれる人がいたら安心だ。

しかし当初CHPSは、モノ

としてあるだけできちんと運営されていなかった。そこで池田専門家らのプロジェクトチームが保健局のスタッフたちと、CHPSの運営の仕組みの制度化や教材の作成、保健師たちの研修に汗を流してきたのだ。ウエスト郡保健局長でCHPSの能力強化を担当するムサ・アリさんは、「昔から、身近なところで、病気で苦しむ人をたくさん見てきた。一人一人が健康に対する意識を高めれば、救うことができる命はたくさんある。それはCHPSの成功にかかっていると、日本人専門家の皆さんにも力を借りて試行錯誤しながら進めてきました」と話す。



西アフリカでの流行が懸念されているエボラ出血熱。ガーナは感染国ではないが、日本の協力などで作成したポスターなどを使って、青年海外協力隊員などが予防の啓発活動を実施中だ

幹線道路から一本入ると、アフリカ特有のどぼろ道。この先にCHPSはある